

戦前の新聞には反映されることがなかった「日本及び世界」の記録

# 同盟旬報 目次総覧

北山節郎監修・解説 全2巻(上巻・下巻)

## 報旬盟同

第一卷第一号

(第一卷第一号)

昭和二十七年七月十五日發行

### 主 要 目 次

近衛内閣成立	二
特別国会法案決定	三
保健社会省創設決定	四
財政三原則の確立	五
官制官階法改正案	六
備前口徑前橋拒絶	七
川越大使降任	八
海軍豫算編成方針	九
商工追加豫算	一〇
日滿航空聯絡開始	一一
政黨動向	一二
日印参事理事決定	一三
秋穫豫想	一四
中旬對外貿易	一五
帝國藝術院創設	一六
南角判事慰人問題	一七

ナニヒツク	一八
ソ聯ホヤール水運閉鎖	一九
妙子不法占據	二〇
蔣介石氏遺囑の真相	二一
國民大會に蔣代表出席	二二
幣制改革成る	二三
平洋不可侵案提議	二四
ウイヤー公債	二五
フロタン危機	二六
獨逸アルリア砲撃	二七
獨逸國際監獄撤退	二八
トハチエフスキー事件	二九
ソ聯露工作と共産黨	三〇
米海軍十六時砲撃	三一
グアムゼーランド經濟自治	三二
日水経済史	三三
スターリン北極圏空路開拓	三四

同盟通信社發行

緑蔭書房

# 戦中ジャーナリズムの 貴重な遺産

北山節郎 (監修者)

昭和戦中期において、ラジオと並び、同盟通信社ほど重要な役割を果たしたメディアはないであろう。同盟は独占的な国家代表通信社として国内・植民地・占領地、更に対外的にも「思想戦の中枢機関」であった。

メディアを論ずる際必要なことは、その報道内容であり、同盟の場合、いつ何をどのように報じたかを知ることである。部分的には同盟記事は、取捨選択改変されて新聞に掲載されたが、同盟報道の全容を知るとはこれまで不可能であった。だが記事を収録した『同盟旬報』が新聞通信調査会等によって保存されていた。同誌と改題後の『同盟時事月報』の復刻に先立ち、各号の主要目次を網羅した目次総覧が刊行される。戦中ジャーナリズムと昭和史研究の不可欠な工具書として広く活用していただきたい。

## 本書の刊行概要

本書は同盟通信社発行『同盟旬報』一号(昭和12年7月)〜一九九号(昭和17年12月)とその改題誌『同盟時事月報』二〇〇号(昭和18年2月)〜二二五号(昭和20年3月)の目次総覧である。

本書は全三巻(上・下巻)とし、上巻には解説と一号〜二二七号までの目次を収録。ただし、一号〜一九号までは目次が不備のため索引にかえた。下巻には二一八号〜二二五号までの目次を収めた。なお、昭和一九年、二〇年の目次の不備を補うため、とくに海外ニュース(大東亜と世界情勢)の部分の目次を小社で作成し、利用者の便をはかった。

本書作成にあたっては新聞通信調査会上(大東亜文化研究所所蔵本)を底本

第一巻第一号より

## 社団法人同盟通信社とは

社団法人同盟通信社は東京大阪を初め日本全領各地に亘る約二百の有力新聞社、並に日本、朝鮮、南洋の開放協同会が共同で組織してゐる通信社(表裏紙内閣承認)である。新聞通信社としての「同盟」の任務は加盟新聞社を以て新聞社と見做し、時々變動するニュースを蒐集し通報することにある。内外の政界財界の動き、日本の事件、任務は加盟ニュースは新聞社より、時々變動する相場の歩みまでが、「同盟」の手に蒐集編輯され、「同盟」のニュースとなつて、中央から地方へ、又地方から中央へと晝夜の別なく刻々に流れてゐる。朝夕の新聞紙やラジオニュースは此の「同盟」のニュースを土壌とし骨髄としてゐる。實際に見た「同盟」の任務は世界五十餘ヶ國の出来事を九千萬の國民に傳へ、同時に日本を世界に向つて報道し開明するに在る。之が爲め「同盟」は或は海外の要地に支社、支局を置き、特派員を派し、又世界通信聯盟二十數社と結んで全世界に通信網を布いてゐる。而して世界の「同盟」の海外向けニュースによつて初めてその日頃の日本を認識する。「同盟」は日本の眼であり、耳であり、その口なのである。

## 「同盟旬報」發刊の辭

報道に関する限り拙速は許されぬ。速きは尠く速く、而も正確であることを必要とする。新聞紙は報道機関として最も大きな地位を占めてゐる。併し新聞に現れた社會相は二十四時間を二つに切断してその切面から透視したものである。従つて事件の發端よりその展開の過程の遠近の方が問題にされ、新聞は又その性質上ニュース價值に左右される。事件の發端より結果の方が輕く取扱はれ、時に重大な事件が無視されるのはその爲めである。「同盟旬報」はかかる日刊紙の持つ弱點の幾分かを補ひ、今日の日本及世界を出来る限り克明に且つ公正に記録して行かうといふ意圖の下に發刊されたものである。然る所必ずしも社會萬般の事象に亘り得ないことは謂ふ迄もない。しかし九を天下の事象に關心を寄せる知識人として、或は又公的責任を負ふ社會人として、當然検討し記録し置くべき、又それらに對する事象は總て網羅されてゐると考へる。自論を立て興論に訴へることは新聞紙の任務であつて、通信社の仕事ではない。「同盟」の爲し得、爲す可きことは事實を出来る限り客觀的に公正に報道し考察の材料を提供することである。「旬報」の編纂はこの原則の上で「同盟」の名を以て蒐集され發刊された「ニュース」を綜合して編纂したものである。更に又、外國通信に於いて「同盟」の占める獨特の地位に鑑み、海外「ニュース」に關しては出来る限り多角且つ網羅的なものとした。一つの事件が「ニュース」として如何に報道され又反響を生んで行くかといふ如き謂はれ「ニュース」の國內的又は國際的重要性に關心を有する讀者に對しても、旬報の外交各欄は多くの示唆を與へ、貴重な資料を提供すると考へる。「旬報」はその資料としての意義を充分發揮せしめる目的を以て、三ヶ月毎に總索引を製作する。

# 戦時の新聞に反映されない 「日本及び世界」の記録

西山武典 (元共同通信社編集主幹)

昭和十一年までの生成の過程を含み、同二十年の敗戦による解体に至る九年余りの同盟通信の活動を記録する資料は余り多くはない。新聞社とちがい、通信社自体はその活動の記録を残すことがない。敗戦時の資料の大々的な焼却がその空白の部分を一そう拡げたといふいきさつもあつて、同盟研究の前進を妨げている要因ともなつてゐる。

その同盟の名において収集された内外ニュースの一部が新聞社に送られ、その量は当時の新聞の掲載スペースの二〜三倍に達している。『同盟旬報』(のちに改題して『同盟時事月報』)は



戦中ジャーナリズムの貴重な遺産

# 同盟旬報目次総覧

北山節郎―監修・解説

全2巻〔上巻・下巻〕 総9558頁

B5判・上製クロス装・箱入り

定価〔本体48,000円＋税〕 分売不可

ISBN4-89774-022-3 C3030

## 刊行予告

戦時中の新聞・ラジオニュースの土台・骨組としての役割を担った同盟通信社のニュース専門誌。戦中ジャーナリズム、昭和史研究に不可欠の史料。

# 同盟旬報

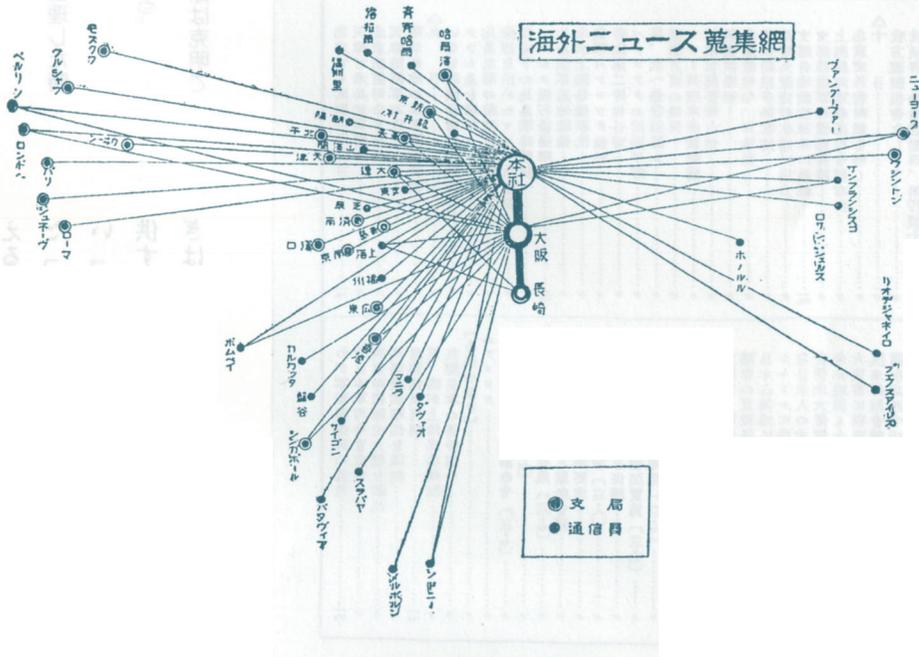
同盟通信社編

全58巻〔全12回配本〕(予定)

昭和12年〔第一巻一号〕～昭和20年〔第九巻二号〕

B5判・上製クロス装・総24,200頁

定価＝未定



緑蔭書房

東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444

特約店